

福島敏夫論説 4

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話－花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

筑波山

近くのコンビニエンス・ストアの正面に、紫峰（しほう）と呼ばれる筑波山がくっきり見える。西側の男体山と東側の女体山が、双方の峰としてみえる。実際には、女体山の方が若干高いはずだが、ここからは、同じぐらいの高さに見えるようだ。筑波山は、北関東の霊峰として、古来いろいろな人の来訪を招き、筑波山神社は、今も、年始の礼拝の対象となっている。「つくばねの峰より流れる男女ノ川恋ぞ積もりて淵となりぬる」という百人一首の歌がある。男女ノ川は、女体山と男体山の峰から流れる川で、桜川に合流して、土浦の霞ヶ浦に注いでいる。富士山と対比して「西の富士、東の筑波」と称される。富士山が、成層火山としてのその美しい姿で人々を魅了し続けてきたが、時々、大噴火で災禍ももたらし、自然の猛威も知らしめる山だった。筑波山は、北関東の霊峰として、自然災害の例も少なく、山岳信仰の対象となってきたようだ。

平成 25 年 1 月 5 日(土)

俳句：つくばねの霊峰仰ぐ冬景色

寿命と生命力

本日 67 歳になった。小・中学校の同級生や、竹馬の友からも、高校の同級生からも、大学の教養学部同級生からも、工学部の同級生からも、大学院の同級生からも、「おまえは、勉強が少しはできるかもしれないが、生き方が下手くそだから、早死しないように気をつけろ」とうような言われ方をされながら、67 歳まで生き抜けたのは、考えてみると不思議な気がする。親族も、かなりの程度癌で亡くなっているから、自分が、癌で早死にしなかったのは、親から受け継いだ生命力が強く、生来の寿命が少し長かったものと感謝すべきかもしれない。世界史に名を残すような偉人は、「この道一筋の生き方」を全うすることにより、人類への貢献の金字塔を打ち立てたのかもしれない。しかし、私のような凡人や世間一般の人は、必ずしも一つの生き方を全うできず、大波小波に揺られながら、かなりの程度、ジグザグコースを歩まざるを得ない。直線的な白黒人生を送る人は稀である。それでも、寿命というものを考えてみると、寿命というものは、ある程度それぞれそれぞれの人で固有のものが決まっているのかもしれないと思うこともある。「天才は夭折する」と言われるように、才能ある人が、生命力に恵まれず、惜しまれつつ早死する人もいるし、天寿を全うして、90 歳近くまで生きて、すばらしい業績を残す人もいる。人が生

き抜くためには、ある程度、情熱と信念がいると言われるが、必ずしもそれだけでなく、心身の健康と環境の面もあるのかもしれない。知力、体力、学力のほかに、生命力というものも、人の生きざまにおける重要な資質と考えられる。また、人間も動・植物も、生を受けて、十分に生命を謳歌し、生命力が高揚する壮年期を経た後は、いずれは死して土及び海に戻ると言う自然の哲理を免れないように、建築・土木の人工の建造物も、長年経つうちには、いろいろな風化・劣化をし、あるいは、地震、火事、風・水害などの自然災害を受けて倒壊し、元の黙阿弥の状態に戻ると言う宿命を免れない。それでも、劣化のメカニズムをよく理解し、工学的な適当な配慮をすれば、医者 of 医療行為にも似て、天寿を全うさせることも十分可能であるが、ある程度は、気候・風土とも関連してくる。材料・部材の寿命、人工建造物の寿命、文明の利器や製品の寿命、動・植物の寿命、人間の寿命、地球の寿命、宇宙の寿命など、寿命にもいろいろある。長らく材料・部材およびシステムの耐久性の研究の一環として、寿命予測もやってきたが、寿命予測が如何に難しいかが実感である。それでも、命ある限り、体が動く限り、頭が働く限りは、続けたいと思う次第である。

平成 24 年 6 月 5 日

俳句：蜻蛉は命を見つめ今生きる